高级日本语教程

新 版

主编 张忠锋 南 海 杨晓钟

陕西人民出版社

高级日本语教程

新 版

策　划　　赵　萍

主　编　　张忠锋　南　海　杨晓钟

陕 西 出 版 集 团

陕西人民出版社

高级日本语教程

新版编写人员

策　划　　张忠锋　赵　萍

主　编　　张忠锋　南　海　杨晓钟

编　委　　张忠锋　南　海

　　赵　萍　杨晓钟

原版编委会名单

策　划　张升余

主　编　杨晓钟　张忠锋

编　委　吴少华　南　海　徐　坚　曹珺红　谢建梅

前言

本教程是专门为大学日语专业高年级学生编写的一部精读教材，在原《高级日本语教程》的基础上进行了修改，全书共分语言、社会、文化、环境、思想五大选题，各选题由五篇优秀文章构成，全书共 25 课，每一课分为课文正文、作者介绍、词汇解释、背景知识、课文指南、课外练习六个部分。体裁有随笔、评论、座谈等，在帮助学生进一步提高日语阅读能力的同时，以图扩大学生的知识面，全方位地了解日本。

本教程既可以作为大学专业日语精读教材，也是一本集中介绍日本情况的高级课外读物。应用面广，实用性强。

本教程的特点集中体现在：

1. 经典的选材。所选文章均出自日本各相关著名人士之笔。文章内容具有较强的权威性。

2. 细致的注释。结合日语专业高年级学生的学力现状对所选文章进行细致分析，筛选出该注释的部分进行必要的注释。

3. 独特的背景知识。本教程区别于国内其他同类教材，对于每一篇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文章所涉及到的重点背景知识，开创性地进行了细致解释，以图帮助学生更加深刻理解文章内容。

4. 图文并茂。课文中添加一些与课文内容相关的插图，插图妙趣横生，借以提高学生的学习兴趣。

5. 在教材的最后设置了“留意点”，其中，对学生在日语学习过程中，所应注意的汉字的使用、以及对即将毕业的学生如何应对面试等 5 个问题，提供一些参考性的建议。

本教程自 2004 年 7 月正式出版以来，在西安外国语大学东方语言文化学院日语专业高年级已使用数届，取得了良好的教学效果。同时也发现其中存在的一些问题，急待进一步完善，在使用数届的过程中，经过数次反复修改，终于修订成为现在的新版。当然书中仍然不可避免会出现错误和不足之处，敬请期望各位专家及读者给予批评指正，以便在今后的修订工作中进一步改进和提高。

本次新版的策划和编写，主要是以长期以来一直从事高级日语课程教学工作的教师为主，具体分工如下。

策　划：张忠锋　赵　萍

编　写：张忠锋（语言篇、环境篇、文化篇）

南　海（社会篇、思想篇、文化篇）

赵　萍（留意点）

审　校：杨晓钟

在新版出版之际，再一次对参加原《高级日本语教程》策划编写工作的张升余、吴少华、徐坚、曹珺红、谢建梅五位老师表示衷心的感谢！

本教材属西安外国语大学资助项目，新版在策划编写过程中受到西

安外国语大学的大力支持，在此表示感谢！

编　者

2010 年 5 月

目次

语言篇 / 1

第 1 課　「はい」と「いいえ」のあいだ——川田順造 / 1

第 2 課　言語と記号——丸山圭三郎 / 14

第 3 課　言葉と身体——前田愛 / 26

第 4 課　母国語の能力——池田摩耶子 / 40

第 5 課　言語の幻想——鈴木孝夫 / 55

社会篇 / 63

第 6 課　迷う犬——別役実 / 63

第 7 課　日本人の契約観とルール——渡辺洋三 / 72

第 8 課　ハイテク化と人間のゆくえ——養老孟司 / 85

第 9 課　人間はどこに向かっているのか

——河合隼雄　ライアル・ワトソン / 102

第 10 課　日本の耳——小倉朗 / 119

文化篇 / 131

第 11 課　夕顔——白洲正子 /　131

第 12 課　四畳半の発見——大橋良介 / 147

第 13 課　初日影のなかで——辻邦生 / 161

第 14 課　海上の道——柳田国男 / 174

第 15 課　日本文化の雑種性——加藤周一 / 193

环境篇 / 213

第 16 課　「共生」とは何か——鬼頭秀一 / 213

第 17 課　水は天から貰い水——富山和子 / 233

第 18 課　自然と人間——佐倉統 / 249

第 19 課　日本の理想郷——平野秀樹 / 267

第 20 課　暴れ川を治める——富山和子 / 289

思想篇 / 304

第 21 課　知る者は言わず――森本哲郎 / 304

第 22 課　日本人の心とかたち――山崎正和 / 319

第 23 課　「である」ことと「する」こと――丸山真男 / 342

第 24 課　常識と良識――吉田健一 / 362

第 25 課　現代の個人主義――山崎正和 / 374

留意点 / 389

1．日本語における漢字使用等について / 389

2．手紙の知識 / 392

3．面接のマナー / 396

4．自己アピール及び履歴書の書き方 / 401

5．和食の食べ方 / 406

参考文献 / 412

语言篇

第１課　「はい」と「いいえ」のあいだ

かわだ じゅんぞう
川田 順造

本文

もう十年あまり前のことになる。私は咳のひどいかぜをこじれさせたのがもとで声帯をいため、医者から一ヵ月ほどのあいだ声を出すことを禁じられていた。かぜの方はもう直っていて、声が出せないという以外、からだの故障はなかった。その頃私は大学の助手をしていたので、毎日研究室へ通い、いろいろな人と「話」をしなければならなかった。相手の言うことは普通に聞こえたので、私の言うことだけ紙に書いて見せる。筆談用のメモ用紙と鉛筆をいつもポケットに入れて持ちあるいた。だから私の発言はすべて記録されていることになり、夜、その日一日の自分の「語録」を読みかえしてみるのはなかなかおもしろかった。

しかし、相手の発言や問いに対して、私がことばで意思表示をしなくてすむと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きは、勿論私は首の振り方で答えていた。そのとき私が感じたのは、日本語の日常の会話、とくに親しい人のあいだでは、否定疑問形が実に頻繁に用いられるということであり、同時に、それに答えるときの首の振り方がいかにむずかしいかということであった。折悪しく、私は生まれてはじめての外国生活だった三年近いフランス留学から戻ったばかりで、相手の肯定疑問に対しては、肯定で答えるときはOUI、否定ならNON、否定疑問に対して肯定の答えのときはSI、否定の場合はNONという習慣（私自身、それを身につけるのが大変むずかしかったのだが）がついていた。ところがこの方式で首を振ると、否定疑問に対する答えの場合、日本では相手に誤解を生じさせることが多い。

たとえば、私が声を出せないということを知らない人と出会ったときの用意に、私はボール紙に「いま声帯をいためて声が出せません」と書いたものを、いつもポケットに入れていた。しばらくぶり出会った友達が、声をかけてくる。私は黙ってその紙を見せる。相手は、それは知らなかったというように驚き、「全然声が出ないの？」と訊ねる。私は「NON、全然声が出ない」というつもりで首を横に振る。相手は、「じゃあ、少しは声が出るの？」私はもう一度かぶりを振る。相手は当惑して、「どっちなの？」ときく。私は今度は紙に、「全然声が出せない」と書く。相手は、なるほどそれは可哀そうに、という表情になり、「で、熱はないの？」—そうら、まただ！

ここで私が「NON、熱はない」というつもりで首を横に振れば、また同じことが繰り返されるのだ。

親しい人のあいだで否定疑問が頻繁に用いられるのは、話し手の同情、危惧、願望、勧誘などが篭められていることの自然な表れであろう。また同じ問いでも、否定疑問にした方が、肯定

疑問のむきだしの感じをやわらげられることが多い。「熱はありますか？」と、医者のような冷静中立の訊ね方をするより、「熱はないんですか？」と否定疑問できく方が、相手に対する思いやりが篭もっている。この場合、「熱がなければいいが」という気持ちが問いかける側にあるからこそ、私が首を横に振れば混乱が生じるのであろう。熱がないときには、私は答えの内容との論理的な整合性はわきにどけ、相手の気持ちを素直に受けて、首を立てに振ればよい。首を横に振るというのは、相手がこちらへ差し向けたものを拒むことになり、むしろ、「ところがそうじゃない、困ったことに熱があるんだ」という感じを表すのにふさわしい。だがそれにしても、ここで首を横に振れば、日本人の場合、答えの内容はかなり曖昧にしか相手に伝わらないと思う。

家を出るとき家人が、「あら、傘持ってかないの？」と言う。こういうときは、私のこのときの経験では、持ってゆくときは首をたてに二度振る、つまり「雨が降ると予報では言っている、傘を持っていけばいいのに」という相手の気持ちを、「ああそうだ、うっかりしていた」というつもりで受けるのが、相手にわかりやすい答え方である。反対に、持ってゆかないときは、首を横に振るのがよい。しかし、「あしたはお弁当いらないの？」というような、話し手の感情がとくに籠められていない中立の否定疑問に対しては、フランス語方式で首を振ると誤解が生じやすい。やはりことばを補って答えの内容を述べる方が確かだ。

声が出せるようになってから、このときの経験を、言語学者も含めて、私の友人に話して得た答えでも、また私自分の限られた体験から私なりにひきだした結論でも、日本語では否定疑問に対する「はい」「いいえ」の答え方は一定していないようだ。ヨーロッパ諸語では、フランス語、英語、ドイツ語、ポルトガル語など、それぞれを母語とする話し手に私が訊ねてみたかぎりでは、すべて一定している。つまり、答えの内容の肯定、否定によって決まるのだ。

一見まぎらわしくみえる場合（Aren’t you up yet？No , I’m Still in bed.）も、それは問いとは別の表現で答えるからで、もし問いと同じ言葉を使って答えるとしたら、答えの肯定、否定でYES、NOが決まるという原則に変わりはない。

つまり、フランス語などの場合は、OUI、SI、NONが、答えの内容に応じた、答え手本位の意思表示であるのに対して、日本語では、その時の状況や話し手相互の関係に左右されながら、問いかけを「受ける」ことに重点があるのであろう。フランス語のOUIやNONがadverbeとされているのに対して、日本語の「はい」「いいえ」は感動詞とみなされ、学説によっては、これを感動の副詞とも呼ぶらしい。

これに関連して、この無言の行のあいだ私がおもしろく思ったことがある。私に用件で電話がかかってきた場合、私はそばにいる人に頼んで、先方に話だけしてくれるよう伝え、それに対する私の返事は、紙に書いてそばの人に送話器の前で読んでもらった。ところが、私が耳に受話器をあて、声をたてずにじっときいている状態が、相手をひどく困惑させるらしいのだ。途中で、「話しにくいなあ」とか「困ったなあ」などとしきりに言う。このとき私は、前にフランス人の社会学者を日本で案内したとき、「君が人と話しながら絶えず発している、“エー”とか“ン“とかいうその曖昧な音は何だ」と訊ねられたことを思い出した。相槌を打つ—鍛冶の作業に由来するこのことばほど、こうした面での日本語の性格をよく表しているものはあるまい。

勿論、フランス語や英語でも相槌のことばは、はっきりした意味をもったものから曖昧な音にいたるまで用いられるし、Oui.やYes.、Oh, no！なども相槌として用いられる。だが、その後むしろ外国で

暮らすことの方が多くなった私が、久しぶりに日本へ帰って母語で話してみると、とくに話し相手の表情による反応が互いに確かめられない電話で話すときなど、日本語で「相槌」が話をすすめるのに大切である度合は、フランス語などの比ではないことを感じさせられる。ブラジルで育ち、成人してから日本語を習い、今日本にいて日本語もかなり達者に話せるイタリア系ブラジル人の友人からきいたことだが、日本人と電話で話しているとき、うっかり相槌を打つのを忘れていると、「おや、電話が切れたかしら」とか、「聞こえますか？」とすぐ言われるという。日本語の会話は、意思表示や自己主張のやりとりである前に、相手の言葉をまず「受ける」ことを重んじているようにみえる。

私がいまその中で暮らしている西アフリカのモシ族の人たちも、彼ら同士の会話で実によく相槌を打つ。モシ族では身分の上下や序列が重んじられ、挨拶が長く、意思表示がはっきりせず、謙遜と押し付けがましさの奇妙な結合がある等々、少し前までの日本の人間関係を彷彿させるものが多い。言語表現における合意の密度が高いことも、俳句などを生んだ日本社会と似ている。擬声（態）語も豊富だ。無論、安直に比較をするつもりはないが、人と人とのコミュニケーションのいろいろな面で日本を思い出させることの多いモシ族だが、n‐yee（肯定）と ayo（否定）の用い方はまったくヨーロッパ式だ。

日本語で「はい」と「いいえ」に感動詞の性格を強くもたせている言語的あるいは社会的条件は何なのか、世界のほかの言語ではどうなのか、モシ族のあいだに暮らしながら、十年あまり前の小さな体験を思い出して、ふと気になることがある。

著者紹介

川田順造（かわだ・じゅんぞう）：1934 年～。東京都生まれ。文

化人類学者。主な著書に『曠野から』『無文字社会の歴史』『聲』『サバンナの音の世界』などがある。「『はい』と『いいえ』のあいだ」は、昭和 53 年に発表されたものであり、本文は『西の風・南の風—文明論の組みかえのために』によった。

言葉の解釈

拗れる【こじれる】(自動):〔なおざりにしたり無理をしたりしたために〕病気や傷がかえって　悪くなり、なおりにくくなる。

折悪しく【おりあしく】(副):(形容詞「おりあし」の連用形から)都合がよくないさま。時機の悪いことに。あいにく。「折悪しく先客があった」

OUI (仏):(肯定の問に対する肯定の答) はい、ええ。

NON (仏):いいえ (OUI に対する)。

SI (仏):否定の問いに対して、肯定の答えをするときの副詞で、日本語では「いいえ」に当たる。

頭【かぶり】(名):あたま。かしら。「かぶりを振る」→不承諾あるいは否定の意を示す。

整合性【せいごうせい】(名):無矛盾性。

先方【せんぽう】(名):相手の人。相手の方。当方←→先方。

Adverbe (仏):副詞。

行【ぎょう】(名):行為。実践。修行。「無言の行」

相槌を打つ:(あいづちをうつ) 人の話に調子を合わせる。

押し付けがましい【おしつけがましい】(形):〔自分の気持ち･考えなどを〕無理に人に押し付けるようである。無理にさせるようすである。

彷彿【ほうふつ】(副):よく似ていること。また、それとよく似ているものがそこに現れたように見えること。ありありと心にうかぶこと。

安直【あんちょく】(形動):〔目的を達するのに〕困難 がないようす。手軽。

背景知識

ジェスチャー--(Gesture)とは、他の人に何かを伝えるためにする身振り手振りのこと。人間の意志の伝達方法として、言葉とともに頻繁に使用される。ボディーランゲージとの違いについては、ボディーランゲージは文化的な約束事を知らないと理解できないことが多いが、ジェスチャーはそのような文化的知識の影響が少ない。ジェスチャーの方がより原始的なコミュニケーション手段であると言えよう。

ボディーランゲージ--（body language）とは、肉体の動作を利用した非言語コミュニケーションの一つである。日本語では直訳して身体言語（しんたいげんご）や身振り言語（みぶりげんご）とも呼ばれる。

これら意思伝達（コミュニケーション）手段は、音声や文字といった狭義の言語を用いずに、身振りや手まね、あるいは広くジェスチャーで様子などを表して、相手に意志を伝えるものである。
ただ、文化圏に拠って幾らかの類似性がある場合と全くない場合、あるいは別の意味に取られる（悪くするとトラブルを招く）など地域性も存在する。

例えば、日本人が親指と人差し指で作る円は、日本人同士ではお金をないし「OK サイン」として使用されるが、ブラジルでは前後の文脈によっては性行為そのものを指示する。

具体的な動作としては、目配せや眉毛の上げ下げ・手招きを含む手での合図、肩を含めた腕の動作、口元の動きや舌打ちなど、また表情や顔色も含まれる。身体の姿勢なども様々に利用されるが、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com